

▶ シリーズ:社会にやさしい活動、温かな空間づくり

シリーズ第1回

埼玉トヨペット（株）「はあとねっと輪っふる」

“すべての人が住みなれた地域で共に学び・共に働き・共に暮らすために”をモットーに、障がい者、健常者、高齢者そして赤ちゃんまでが一緒になって活動をする場

2008年6月30日

レポート：安部基史

今回よりシリーズで、「社会にやさしい活動、温かな空間づくり」に取り組む企業や団体、個人を紹介してまいります。

その第1回は、埼玉トヨペット株式会社の社会貢献事業「はあとねっと輪っふる」です。

同社は埼玉県全域をカバーするトヨタ自動車の大手販売会社で、もちろんビジネスは新車の販売が基本です。その中で、やさしい社会づくりに関連するものとしては、福祉車両（トヨタ自動車では「ウェルキャブ」と呼んでいます）の販売が中心でした。これは本業のバリエーションに他なりません。しかし同社では、2002年からは、ウェルキャブを展示販売するショールーム機能を自ら再構築、「すべての人が住みなれた地域で共に学び・共に働き・共に暮らすために活動する場を提供・支援する」コミュニケーション支援拠点に転換して、「はあとねっと輪っふる」のネーミングを与えました。



こうしてウェルキャブを販売するだけの小売機能から脱却。ウェルキャブにある各種サポート機能を必要とするような、障がいやハンデを持った人はもちろん、子ども、高齢者、子育て中の人など、多様な人々がコミュニケーションできる空間としてリニューアルオープンしました。すべての人間が共に地域で普通に生きていける社会づくりである「ノーマライゼーション」(normalization)が、「はあとねっと輪っふる」の活動理念となったわけです。

「はあとねっと輪っふる」の主な活動として、埼玉県内の子育てや高齢者活動に関するNPO等への活動スペースの提供、本レポートに取り上げている農業体験、パンの販売、アートギャラリー、就労支援などがあります。ここに福祉車両の無料モニターサービスを組み込んでおり、“問い合わせがあるまでは決して販売の話はしない”徹底が、同活動への信頼と、福祉車両の販売堅調化につながっています。

試行錯誤ながら手を抜かず続けてきた6年間の活動が評価され、地元・埼玉県からは平成18年の『第3回彩の国にやさしいまちづくり賞活動部門』の優秀賞を、平成19年には、内閣府が主導するバリアフリー・ユニバーサルデザイン推進についての『第6回バリアフリー化推進功労者』として内閣府特命担当大臣表彰を受けました。

販売台数が正義、トップセールスマンだけが評価される・・・そんな体質が色濃い新車販売業界にあって、これだけ本格的に企業市民としての責任を発揮している販売会社を探すのは恐らく難しいで

しょう。本レポートでは、自動車販売のプロ中のプロである店長が、ある日、まったく馴染みも経験もない社会貢献活動を任されて、戸惑いと失敗を重ねながらも、やがて自動車販売で培ったノウハウも活用しながらその意義と面白さを理解して、次の世代にバトンタッチするまでのドキュメントにフォーカスしながら、「はあとねっと輪っふる」のやさしい活動と温かな空間をご紹介します。

→pdfファイル：全9ページ



「農業体験」として、田植えの体験機会を提供



「はあとねっと輪っふる」のオフィス（本社1階）

※次回は、誰でも車いす体験ができる「あらかわ福祉体験広場」（国土交通省荒川下流河川事務所）

| [HOME](#) | [Report](#) | [Book](#) | [About Us](#) | [New](#) |

© Fantastics Inc. All Rights Reserved
このページに掲載の記事・写真の無断転用を禁止します。

[▶ お問い合わせ](#)

『はあとねっと輪っふる』

所在地:
埼玉県中央区上落合2-2-1
埼玉トヨペット本社1F
TEL
048-859-4130
FAX
048-859-4312

埼玉トヨペット株式会社

<http://www.h7.dion.ne.jp/>

ノーマライゼーションの実現を 一緒にいることから創りあげていく

すべての人が
「住みなれた地域で共
に学び・共に働き・共
に暮らす」ために
活動する場を
提供・支援

編集部には様々な企業から、新商品や新サービス、会場情報等を掲載したニュースリリースや資料類が送られてくる。こちらの取材活動で申し込んでの返信物もあれば、純粋なレターになったリリース類、それにカタログ、パンフレット等である。近年、コストダウンと利便性からeメールでの配信が増えたとはいえ、送られてくるこれらメディアはどれも立派な装丁で、一目で発信元のC Iがそれとわかるデザイン、クオリティを保持している。

そのなかで、毎月送られてくる『はあとねっと輪っふる かわら版』は、たいへん地味な装丁である。市販の色付きB4用紙にワードプロセッサ等で作成した原稿をコピーして作成したに過ぎない。もちろん、モノクロであり、掲載された写真のクオリティは“本文をよく読むことで、言いたいことがだいたいわかればよろしい”くらいである。B4用紙2枚を二つ折りにした8頁の構成で、封筒も汎用品を使い、発信元の『はあとねっと輪っふる』の名前をスタンプで印字して送られてくる。

しかし本文を読んで（最近の言い方では“コンテンツを見て”になるのだろうが）、そこから想起される世界の広さ、作成に携わっている人々の思いの深さ、収録されたトピックスひとつひとつの意味の厳しき等は、当方に送られてくるリリースやドキュメント類とは比較にならない。実は月刊で通巻58号を数えるこの『はあとねっと輪っふる かわら版』、その制作は埼玉県さいたま市でデイケア施設・ノイエを運営される「OMIYAばりあフリー研究会」のみなさんによる手作業による作品なのである。毎月2,500部を印刷、1,000部が埼玉トヨペット内各店各部署・関係各者に送付されている。

その表紙を見ると、筆者は一人の男の存在を思い出す。初めて逢ったのは、埼玉県鴻巣市の郊外に広がる田園、その一角に向かう農道であった。収穫を迎えた稲穂のなかで、ひときわ目立つ大柄なシルエット、そしてよく通る声・・・その人こそ、埼玉トヨペット株式会社が取り組む、企業としての社会貢献活動である『はあとねっと輪っふる』を2002年の発足時から担当してきた渡辺新一（同社総務部総務課・担当副部長/取材当時）さんである。



「はあとねっと輪っふる」与野店にある拠点空間



「稲刈り」の会場は埼玉県鴻巣市



「はあとねっと輪っふる かわら版」



2008年6月に実施された田植え

■「バリアフリー化推進功労者」として 国からも表彰

『はあとねつと輪っふる』は、“すべての人が住みなれた地域で共に学び、共に働き、共に暮らすために、障がい者、健常者そして高齢者から赤ちゃんまでが一緒になって取り組んでいく”ために、埼玉トヨペットが企業のポテンシャルを駆使している社会貢献活動である。その本格性は、埼玉県内のノーマライゼーションやバリアフリー、福祉・介護関係者には広く認知されている。メーカーのトヨタ自動車からはグループを代表する社会貢献活動として認められており、地元埼玉県からは平成18年の『第3回彩の国にやさしいまちづくり賞活動部門』で優秀賞を、平成19年度には、内閣府が主導するバリアフリー・ユニバーサルデザイン推進についての『第6回バリアフリー化推進功労者』として内閣府特命担当大臣表彰を受けた。「子ども、高齢者、障がい者、子育て中の人など様々な人々が、活動し、交流できる場を提供するとともに、情報発信、活動の企画・実践を行い、社会の様々な人々が共に働き、暮らす社会の実現に向けての活動（同表彰の講評による）」が高く評価されたのである。

■「ウェルキャブプラザ」が “販売しない”交流空間に

2002年の発足以来、活動の本拠地は、同社の本社・与野店ショールームの一角にある。『はあとねつと輪っふる』が開設される前は、福祉車両を展示する『ウェルキャブプラザ』だった。そこにやって来たのが、デイケア施設を運営しており、自らも電動車いすを使っている「OMIYAぱりあフリー研究会」諸氏からの声であった。“グループでミーティングをしようにも、車椅子で行ける場が少ない”、“障がい者だけ、健常者だけではなく、ともに交流して情報交換できる機会が欲しい”...この切実な訴えは、当時『ウェルキャブプラザ』をもっともっと有効に活用できないか、いつもにぎわいのあるショールームにできないだろうか等と思い悩んでいた同社代表取締役社長平沼一幸氏に、「障がい者だけ、健常者だけという括りでな

く、あらゆる立場の人が交流して情報交換できる機会と場所にする」決意をもたらしたのである。こうして、福祉車両を展示販売する旧概念のショールームに止まらない、「はあとねつと輪っふる」が誕生することになった。

ここで大事なことは、販売会社ながら、『はあとねつと輪っふる』の活動を通じて、無理に福祉車両を販売していない事実にある。むしろ、消極的かもしれない。渡辺さんによると、「結局は売り込みではないのか？」などと、当初は色眼鏡で見られたこともあり、一方ではベテラン営業マンとして、売上のノルマが与えられないことに戸惑ったという。

引き合いや依頼があれば真摯に対応するが、当事者から押しつけがない。この姿勢を今日まで貫いてきたが、障がい者・健常者問わず『はあとねつと輪っふる』への参加・訪問経験から、同所だけで30台以上の紹介販売実績を残している。そして同社の販売する福祉車両の総計は、2006年に230台、2007年は252台と順調に拡大を続けている。

■08年3月からさらに拠点を充実

“一緒にいることから始めよう”とスタート、当初はノーマライゼーション実現に向けた活動を主体に取り組み、交流の輪が年々拡大して5年が経過した現在は、子育て支援グループやシルバー世代など、関わる人々の輪はますます広がっている。“皆が共に楽しみ一緒に活動する輪が着実に広がっている”ことに、強い手応えを感じている。

このため、2008年3月にはスペースが拡充され、トヨペット店ショールーム空間の有効利用的な位置づけはさらに希薄となり、むしろ店舗の核機能を感じさせるレイアウトに変更されている。



稲刈り時（上）とビジネスタイムの渡辺さん

“グループでミーティングをしようにも、車椅子で行ける場が少ない”
“障がい者だけ、健常者だけでなく、ともに交流して情報交換できる機会が欲しい”
(OMIYAバリアフリー研究会)

誰とでも会話して、社内外の認知を拡大。“居場所づくり”に成功

ここを拠点として、子ども、障がい者、高齢者、子育て中の人、ボランティア、企業関係者など様々な人々が集い、アートギャラリー、農業体験、パンの販売、赤ちゃんサロン、障がい者の就労支援、大学生のインターシップの受入れなど多彩な活動を行うのである。自動車販売店の活動について多数のレポートを発行している当社にとっても、『はあとねっと輪っふる』のように、販売会社が主体的・本格的に社会貢献活動に取り組むケースを把握しようというのは初めてのことであった。早速取材を申し込んだところ、快く対応を頂いたわけだが、指定された取材はなんと農業体験で、具体的には「稲刈り」という指定。これにもたいへん驚いた。

自動車販売会社の取材で、店舗のショールーム以外で行うというのも未知の経験だったのである。

■ゼロから活動の中身と規模を構築

2002年の『はあとねっと輪っふる』の発足時に、担当に指名されたのが渡辺さんである。簡単に言うと社長的一声で、それまでの店長職からの異動であった。当初はかなり面食らったことであろう。自動車販売店の店長というのは不器用なタイプが多い。クルマを売るためのノウハウ、マネジメントには卓越しているが、それ以外の仕事となるとどうも販売のようにはうまくこなせないといった傾向がある。渡辺さんも不安を抱えながらの船出だったという。その気持ちはよ〜くわかる。なにせ事例（モデル）がない上に、ゼロから仕組みを作り上げる必要がある。まさにトヨタ的ではない。既にある商品（新車）を売っていくのとは訳が違う。

また、いかに社長の発案とはいえ、社員全員がその考え方や方向性についてきっちり把握していたわけではなかったようで、まずは社内の理解を浸透させる努力が必要とされたそう。というのも、自動車販売店の社員は本社よりも各店舗の方が多い。それが一同に集まる機会がかなり限られてしまうのもこの業界の特徴なのである。

多数を占める営業職にとって、現実には目の前のお客さま＝商談が大事であって（これは店長にしても結果という意味で極めて重要）、『はあとねっと輪っふる』のような取り組みには、認識が及びにくい構造にある。また、活動の拠点を置いた与野店（本社の1階部分）でさえ、福祉車両を扱いながら、コミュニケーション不足から同店のスタッフとの連携がとれる状況ではなかった。

そこで、渡辺さんはまずは認知促進に取り組み、冒頭で紹介した活動のニュースリリースでもある『はあとねっと輪っふる かわら版』を各店舗に必ず送付することや、店長と会う機会を捉えて説明を行う、さらには福祉車両のモニター募集を行い、応募されたお客さまを最寄りの店舗に案内して贈呈式のようなセレモニーを行い、販促にも協力するなどして、インナーはもちろん関係者・団体等への認知＝『はあとねっと輪っふる』の社内的・社会的な居場所＝をコツコツと構築してきたのである。こうした努力の甲斐があつて、発足から2年後の2004年になってようやく毎年の新入社員向け研修で、『はあとねっと輪っふる』が具体的に説明されるようになった。今では、年末にお客さま向けに配布する同社のオフィシャルカレンダーに、2008年版から『はあとねっと輪っふる』の活動スケジュールが記載

されるまでになっている。企業として当たり前の情報公開だろうが、自動車販売とは異質な内容を加えるというのは異例であろう。これには、一般のお客さまの関心をもっと喚起したいこともあるという。

■トップの的確・迅速な判断もあり
認知と信頼が拡大

ここまでのプロセスは実直であり、スキームにはいっさい手抜きがない。というのも、2002年の最初の福祉車両モニター募集は、期間3カ月、対象車両の3台に対して120件に及ぶ応募が集まったのだが、告知には三大紙を使ったのだという。一般的にこうしたイベントを行う場合、店舗のポスターや折り込みチラシの一部を使うようなやり方になるだろうが、それでは募集効果は？であろう。『はあとねっと輪っふる』の当初からの本気度に驚いてしまう。さらに、この大きな反響を受けて、同社・平沼一幸社長の即断で、すぐにモニター車両は3台から5台に増車されたのである。

なお、福祉車両モニター募集は現在も続けられており、5台（イブサム＝助手席リフトアップシート仕様、アルファードG＝車いす仕様スロープタイプ、ハイエース＝同全自動スイングアームレスト、ラクティス＝同スロープタイプと助手席リフトアップシート。2008年第2四半期の第18回の場合）が用意されている。当選発表後のモニター車引き渡しは『はあとねっと輪っふる』の拠点である与野店のイベント用ステージを会場に、当選者をはじめ関係者等100名以上を集めての一大セレモニーとして行われている。



稲刈りのもう一つの楽しみ、昼食

■福祉車両モニター体験をきっかけに、農業体験を支援

このモニター応募が縁となって、『はあとねつと輪っふる』の活動を支えるボランティアの一人となったのが、最初に紹介した稲刈りの場を提供している埼玉県鴻巣市の農家、中島さんである。

2002年当時、ご祖母様が車いす生活を余儀なくされており、通院等に利用できればと、モニターに応募。見事に当選した。それから3カ月、ご祖母様の行動範囲が確実に広がって、自宅から離れた場所にある自田の田植えにも行くようになったという。

これが縁となり、モニター期間が終わってからも、中島さんは『はあとねつと輪っふる』の活動のひとつ、障がい者・健常者、大人・子供が共に田植えから稲刈りまで実施する農業体験の場として、保有する田圃の一部を開放しているのである。もちろん“プロの農業者”である中島さんは、ご夫婦で田植えや稲刈り、種籾まで障がいや経験の有無を問わず、やさしくわかりやすく指導してくれる。「苗の根に泥を付けて田んぼに投げ入れる「投げ植え」や、実際に水田にゴムボート

に乗って入り、所定の位置に苗を植えてなど、ハンデの有無を問わず田植えを体験できるように工夫してきたんです」と、これまでの取り組みを熱く語ってくれた。

筆者をはじめとする取材陣の3人にとっても、稲刈りの機会は滅多になく、渡辺さんの勧めで少々体験させていただいたが、開始早々に腰痛を訴える筆者には、周囲の参加者から厳しくも（「その程度で値を上げちゃあみつともないわよ！」）温かい（「そーら大変でしょう〜」）叱咤激励が寄せられた。

稲刈りは伝統的な鎌を使って行われる他、コンバインも稼働していた。誰かと思えば、同社の平沼社長が自ら運転・操作していたのには驚いた。自動車販売業のトップともなれば、やはりどんなクルマでも動かしたくなるものなのだろうか。それにしてもその操作は本職の農家並み？であった。



平沼一幸同社代表取締役社長



中島信一郎さん

苗の根に泥を付けて田んぼに投げ入れる「投げ植え」や、実際に水田にゴムボートに乗って入り、所定の位置に苗を植えていくなど、障がいのあるなしを問わずに田植えを体験できるよう工夫してきました。

（自らの水田の一部を活動に提供している中島信一郎さん）

障がい者への仕事体験提供や、インターンシップ対応など積極的に就労支援に取り組む

■インターンシップで

地域の大学生を受け入れる

参加者の中には、2003年からインターンシップで受け入れを続けている、地元・埼玉県にある文教大学の学生の姿も見られた。インターンシップとは、学生が在学中に一定期間、企業等の中で研修生として働く就業体験の制度である。『はあとねっと輪っふる』の活動に参加によって、はじめて知的障がい者の日常や車いすを使う生活を目の当たりにする学生がほとんどである。当初は驚愕と緊張で食事も喉を通らない学生たちも、実施期間の10日間を無事終える頃には、当たり前のようにコミュニケーションができるようになるのだという。同社では、依頼がある限り、「責任を持ってお預かりする」としている。

さて、そうこうしているうちに数時間で見事に稲はきれいに刈り取られる。子供たちは稲に隠れていた大量のカエルを捕まえるなどして大騒ぎだ。ちなみに『はあとねっと輪っふる』で使用する水田の稲作は無農薬で行われている。その証明がこの大量のカエルで、農薬を使っている隣の区画（既に刈り取り済みであったが）ではほとんど見られないという。

なお、この稲刈りは農業体験では恒例のイベントとして、年中行事に組み込まれている。2008年の田植えだが、6月7日（土曜日）10:30~15:30、例によって埼玉県鴻巣市の中島さんの田圃で行われた。参加費は500円（小学生以下は無料）、昼食付きである。いやあ、なんと言ってもこの昼食に出るおにぎり、漬け物は絶品で、あの『船場吉兆』ではないが、手つかずが出れば全部持って帰りたいくらいの美味である。加えて、2008年には手打ちうどんが食べ放題であった。次頁で田植えの様子を速報する。

ページ6へ続く



最初は本当に驚きの連続でした。車いすの方と一緒に電車、クルマ、徒歩ととにかく行動を共にするんですが、みんな迷いがない。絵画作品などは、はじめはプロの作品かと思っただけです。

（インターンシップで参加していた大学生談）

2008年の田植えは、埼玉県内の養護学校の生徒やNPO「彩の子のネットワーク」に参加する親子づれ、そして埼玉トヨペットの新人社員など約100名が参加して、中島信一郎さんが提供する埼玉県鴻巣市笠原の水田で、好天にも恵まれ無事終了しました。以下はその模様です。



梅雨入りした関東だが、当日は好天に恵まれる



田植えに使う苗は十分に用意



初めての“泥んこ体験”にちょっとびっくりです。



全員でサポートして“ボート植え”も体験できる



同社・浪江和夫代表取締役副社長も参加



お楽しみの全員集まっての屋外での昼食風景

■「お客さまの話を徹底してお聞きする」基本

07年の秋、最初の取材となった中島さんの田圃の中で、ひときわ景観と環境に馴染んで見えた渡辺さんは、ゴルフ焼けと言うより農作業焼けのような褐色かつ精気のある表情で、稲刈りの段取りや集まった約80名近い参加者のフォローに努めていた。自動車販売店の店長といえば、色黒が多い（あくまで私見である）。というのは、疲労とストレス過剰から、たいてい何からの不調を抱えており、とても健康的な元気があるようには見えないのである。一般のビジネスマンと違って、1時間きちっと昼休みをとって、バランスの良いレシピを選んでちゃんと噛み砕いて食べているような店長は少数派で、多くはカツ丼も焼き肉定食もカップ麺も食事時間に変わりはないのが現実である。

渡辺さんも辞令を受けて「“なんで俺が”とも思った」というから、言葉に出せない苦労もあったのだと思う。しかし、4年間の歳月は決して“困惑と疲労の4年間”ではなく、まさに稲穂が実るような充実の時間だったと確信する。失礼だが、もしも店長職をずっと続けていたら、あのような精気は生まれなかったのではないか。

当初は、相談相手は誰もいない。福祉関連の知識もない。手となり足となるスタッフもいない。本社もそれほど協力的でない。個人ががんばるしかない、ないない尽くしの状況から初めて、今のような活性ネットワークの実現に成功したのは、渡辺さんの話し相手をほっとさせる雰囲気や、人生経験といった個人の資源もあるだろうが、

それ以上に「お客さまの話を徹底してお聞きする」ことに徹する自動車販売店の営業経験と、どのような相手とも分け隔て無くおつきあいしていくコミュニケーションの実践、必要に応じて自ら手話も覚えるという向上心と実行力が発揮されての結果ではないだろうか。つまり「徹底した傾聴」という、自動車販売の基本的営業スキルがしっかり定着していたからできたことである。

渡辺さんは初代のDUO店長の経験もあり、ゼロからの築きについてトップの高い信頼があるからこそその人事だったとも想像できるのだが、ベテランだからすぐに適応できるとは限るまい。ベテランゆえに、違った環境、手法に馴染む難しさもある。「半年以上、誰とでも会話の機会を持って、時には食事と共にしながら、輪っふるの仲間になっていきました」（渡辺さん）という柔軟性、適応性があつたからこそ、傾聴のスキルが120%以上発揮されたのであろう。

ここ数年、いわゆるプレゼンテーション文化の影響か、はたまた少子化の影響もあるのだろうか、自動車販売店の若い営業スタッフに「話し上手、押し上手」が増えている一方で、「聞き上手」が減っているように見える。実際、メーカーや本部の研修では、提案力については傾聴とセットで教えることにより、こうした状況に歯止めをかけようとしているようだ。傾聴スキルがいかに大事か、その習得がどれだけ自分を助けることになるかは、離職率が高い自動車販売業では特に見つけ直すべきであろう。

■場所を提供して人が集まり、輪が拡大するサイクル

農業体験の他、『はあとねつと輪っふる』のノーマリゼーションの活動は以下の通りである。

●パンの販売

- ・毎週木曜、土曜日は『はあとねつと輪っふる』拠点（同社与野店内）で販売
- ・顧客は同社社員や近所の生活者
- ・パンの販売を通じて人と人との繋がりを広げていく。
- ・毎週金曜日は出張販売（同社「伊奈配車センター」と「一平蓮田工房」、「浦和サービスセンター」（下取りした中古車を受け入れ、点検、整備をする拠点）。障がい者2名と社員1名で実施

●福祉車両モニター

- ・対象：介護の必要な方、障がいをお持ちの方
- ・モニター車として、福祉車両5台を3ヵ月間、無料で貸出

●アートギャラリー

- ・障がいを持ちながらも意欲的にアート作品を作り続ける人たちの作品（「輪っふる連続展示企画」の開催）、地域の生活者の作品発表の場として展示スペースを提供

●就労研究

- ・就労支援などに関して、一般社会人を支援者として起用する事などにより、その理解を促進する。
- ・埼玉トヨペット関連会社での障がい者就労体験実習を行っている。
- ・インターンシップへの受け入れも積極的である。（埼玉大学、城西大学、文京大学等）

場所と機会の提供に徹したことで関係団体・個人が増大。 「売り」は引き合いがあつてからの対応に徹底。

■埼玉県を代表する企業の社会貢献活動に

受賞等の報道や紹介などで『はあとねつと輪っふる』の認知が拡大するにつれ、活動に関係する団体や個人が増えている。例えば前出の『彩の国にやさしいまちづくり賞』を紹介、応募を勧めた東洋大学の高橋儀平教授の紹介によって、各地の障がい者団体、養護学校の先生などのネットワークが拡大したという。

自動車販売会社らしいのが、「NPO法人彩の子ネットワーク」（参加者100名規模）とのつながりである。同NPOがイベントを開催する際に、福祉車両の展示車を提供したのが縁で、以後は『はあとねつと輪っふる』のある本社の会議室を使って、毎月第2・第4木曜日の10時～12時に近所の赤ちゃんを集めて、子育てに関する交流の場となる「赤ちゃんサロン」を開催するようになった。渡辺氏によれば、当初は2～3ヵ月続けばなあと思っていたのだが、いつのまにか定着、現在も続いているのだという。子育てで悩んでいる母親が、経験者や当事者間で相談・理解しあう機会と場づくりは、核家族化が進む日本では非常に大事な政策である現実がわかる。

年に1回開催され、5,000～6,000人が集まる同NPOのイベント時には、福祉車両の展示車提供はもちろん、『はあとねつと輪っふる』のスタッフで各種のフォローを行うなどの協力を惜しまない。

また、高齢者の集まりである「シニアライフ研究会」（埼玉トヨペットのOB社員も参加する40～50名のグループ）がある。同会は、埼玉県立大学の朝日教授が主催する『さいたま障がい者就学サポート研究

会』（別名“サンライズの会”）に、埼玉トヨペットも参加、会議室の無料提供や就学者の受け入れ等の協力関係を築いてきた経緯で生まれた任意団体だが、ここ『はあとねつと輪っふる』で「呈茶の集い」といった文化体験活動を行っている。

■渡辺さんから轟さんたちへ、 文化が受け継がれる

出会いがあれば、また別れもある。2007年の暮れ、『はあとねつと輪っふる』事務局に、新しく轟和宏（とどろき・かずひろ）さんが加わり、渡辺さんは第一線を退くことになった。華向けとなったのが、内閣総理大臣官邸で行われた第6回バリアフリー化推進功労者の内閣府特命担当大臣による表彰式・祝賀会への同社平沼社長との出席である。

“この活動を続けてきたよかった”と思ったという（『はあとねつと輪っふる かわら版』第54号、「渡辺日記」最終回より）。会社員である以上、渡辺さんも定年を避けて通れないわけだが、輪っふるのホームページを見る限り、2008年度からはアドバイザーとして、さらには『世話人会』のメンバーとして活躍されるようである。

渡辺さん、何度も取材に時間を確保していただき、ありがとうございました。



轟和宏さん

「私は何か考えた
いときに、よく海
に行きます。大き
な海を見ておりま
すと、自分の考え
ていることがちっ
ぽけに感じて、パ
ワーをいただき、
間張るぞーと叫ん
だりしております
す」

（『渡辺日記』
第54号より）

『はあとねつと輪っふる かわら版』は第55号から、「渡辺日記」に代わり新任の轟さんの筆による「とどさんトーク」が始まった。実は、筆者は轟さんを前任だったレクサスさいたま南のマネージャー時代から知っている。トヨタ自動車のビジネスのなかでも、レクサスは既存のチャネルとの人材交流はないと言われていた（当初）から、『はあとねつと輪っふる』事務局に異動したと聞かされてかなり驚いたものである。しかし、その実直な人柄、丁寧な仕事ぶりから言っても、渡辺さんの後継者として活動を引っ張られる人材として、まさに適材適所の人事とも言えるだろう。

例えば、レクサスの立ち上げから営業本格化までの道程は、従来の自動車販売と一線を画した、壮大なブランド開発プロジェクトであった。そこに集められたスタッフは、それまでの自動車販売の常識を捨て、新たなオペレーション、マネジメントそしてマーケティングに取り組むことになったのである。例えば最近、某社が新車のティーザー広告で訴求している「おもてなし」がある。実はこの「おもてなし」は、レクサスのブランドの根幹に位置づけられていること、それを基本

に様々な対お客さま活動が設計されていること、それをレクサスに関わるすべてのスタッフが数年に及ぶ徹底した研修等で身につけてきたことは、それほど知られていないようだ。轟さんは、レクサス店では店長に次ぐ責任を持つマネージャーとして、こうした新しい世界で切磋琢磨してきたのである。筆者がまだ建設中の「レクサスさいたま南」で初めて会ってから、次はインストラクターと受講者の立場で、その次は映像ディレクターとスタッフとして、直近は取材者と発信者という立場に変わったこの4年間、いつ会っても立場はどうあれ、轟さんは常に歓迎してくれたものである。

■ぶれず、変わらず、貫かれるべき 理念と活動

2008年度版の『はあとねつと輪っふる パンフレット』、いわば活動の年次報告書の冒頭、第1頁に次のようなメッセージが載せられている。

“これからはという、勿論、今迄やってきたことを継続していくことは大切ですし、一つ一つの中身も充実させていきたい。そして、そろそろ何か核になるものが欲しいと思います。「輪っふる」だからできること、それ

はやはり「働く」ということではないでしょうか。モーターショーを初めとする販売店主催のイベントでのアルバイト、関連会社での実習、定期的に就労研究会も行われています。教育はもとより、就労からも排除され、働くイメージすらも持てぬまま福祉的な場だけにとどまらざるを得ない、障がいをもった多くの人達、こうした現状の中、「輪っふる」の果たす役割は大きいと思うのです。“

誰もが働く権利を持っている。しかしそのチャンスを障がいや環境を理由に与えられないのは、重大な社会的齟齬である。そこで『はあとねつと輪っふる』は、自動車販売活動への参画促進を柱に、多くの協力者・賛同者と共に、生活のための就労を促進しようというのである。輪の中心は埼玉トヨペットにあり、『はあとねつと輪っふる』事務局がその責を負っている。轟さんをはじめ、スタッフの神山さん、石井さん、佐藤さん、そしてアドバイザーとなった渡辺さんには、これまでのように「ぶれない」活動を維持してもらいたいと思う。もちろんそれが確実に実行され続けることに、筆者は一切の疑義を持っていないのである。

(本誌編集長・安部基史)



新事務所での「アートギャラリー」



「はあとねつと輪っふる」所在地